

能〈野宮〉の「車」と「月」

倉持長子*

※本稿におけるテキストの引用について

①謡曲本文は日本古典文学大系『謡曲集 下』（岩波書店、一九六三年）による。

②『源氏物語』本文は新編日本古典文学全集『源氏物語』②（小学館、二〇〇六年）による。

はじめに——〈野宮〉と〈葵上〉——

能〈野宮〉の後場は、シテを六条御息所の霊とする先行の能〈葵上〉を強く意識して作られている。たとえば、車争いで敗れた後シテ御息所の尽きない妄執を表現する「身はなほ牛の小車の、廻り廻り来ていつまでぞ」は、〈葵上〉前シテの次第「憂き世はうしの小車の廻るや報ひなるらん」をふまえたものである。また、〈野宮〉キリに「また車にうち乗りて火宅の門をや出でぬらん」と見える詞章は、諸注も示すように

〈葵上〉の前シテ登場の一セイ「三つの車にのりの道火宅の門をや出でぬらん」に拠るものである。

先行研究では、伊藤正義氏⁽²⁾が『野宮』後段において『葵上』が本説的位置を占める⁽¹⁾、「野宮」後段は車争いをとりあげるのみのようであるが、その中に『葵上』詞章をふまえることによって、その世界をも一體化せしめた⁽³⁾と述べている。井上愛氏⁽³⁾も、〈野宮〉は御息所の傷心を「破れ車」で表した〈葵上〉世界を「本歌取りの」に重ね、「〈葵上〉の怨霊的な造型をも色濃く投影した御息所像を描く」と論じる。

しかし、〈野宮〉における〈葵上〉の取り込みの方法については、河添房江氏⁽⁴⁾が「同じく六条御息所の物語に取材しながら、生霊事件をそぎ落とすことで、それを主題化した『葵上』よりも幽玄の境地をきわめた」と指摘したように、もう少し注意が必要ではないだろうか。筆者は、特に次の二点について検討の余地が残されていると考える。

第一の問題は、〈葵上〉と〈野宮〉それぞれの「車」の意味についてである。両曲に頻出する「車」については、味方健氏⁽⁵⁾によって「廻り廻る彼女の迷える魂、すなわち有情の妄執輪廻の表象」という共通の意味が見出されている。ただし、同じ「車」であるとしても、シテ御息所が〈葵上〉では「破れ車」、一方の〈野宮〉では「秋の千草の花車」「網代」に乗って登場するという対蹠的な様相を見せる理由についての説明が必要であろう。〈野宮〉における「車」「車争ひ」は、〈葵上〉のそれとどのように異なり、曲中においていかなる固有の意味を持つのか、より厳密に追究しておく必要がある。

第二は、シテ御息所が「賀茂の祭の車争ひ」で敗れたさまを再現し、過去の妄執をその身に再び呼び覚ます場面に先立ち、なぜ「月」が姿を現して来るのかという問題である。前シテは中入り直前、その正体を

「御息所はわれなり」と明かし、「森の木の間の夕月夜、影幽かなる木の下、黒木の鳥居の二柱」に姿を隠す。また、後シテ御息所の「花車」は「月の光も幽かなる」とはかない月光のもと、密やかな「音」を立てて登場する。「車争ひ」場面の再現において、なぜ「車」は「月」——特に「幽かなる」「月の光」——に導かれるように登場するのだろうか。さらには、後シテが「車争ひ」から生じた妄執を激しく悲嘆した直後、「昔を思ふ花の袖。月にと返す景色かな」「月も昔や思ふらん。影淋しくも、森の下露」と「昔」を偲ぶためのよすがとして「月」に思いを馳せ、突如懐旧の序ノ舞へ移行するという、やや不自然にも見える後シテの心境についても併せて説明が必要になるだろう。

これらの〈野宮〉後半における「車」と「月(月の光)」の問題は、先行の〈葵上〉のみならず、〈野宮〉の本説である『源氏物語』の葵・賢木両巻に共通する六条御息所をめぐる描写に着目することで読み解けるのではないだろうか。〈野宮〉の作者に比定される金春禅竹は、これまで『源氏物語』の深い読み手であることが多くの先学によって論証されてきた。⁽⁷⁾この〈野宮〉の「車」と「月」に込められた意味もまた、禅竹の『源氏物語』に対する深い理解を裏付ける好例になると考えられる。以下、考察をすすめることにする。

一、〈葵上〉の「破れ車」

〈野宮〉に先行する〈葵上〉の前場は、「三つの車」「破れ車」「忍び車」「牛の小車」「車の輪」「牛もなき車の轆」と「車」尽くしである。〈葵上〉では、車争いの場面そのものは描かれず、「破れ車」という言葉によって、すでに車争いの生じたことが自明とされている。「夕顔の宿

の破れ車」「上臈の破れ車」「枕に立てる破れ車」と曲中に三回見える「破れ車」は、落合博志氏⁽⁸⁾によれば、『源氏物語』葵巻に描かれる車争いの場面には見えず、御息所の車が壊されたとする中世の『源氏物語』理解を踏まえたもので、「車争いによって打ち砕かれた御息所の自尊心の表象」であると意味づけられている。

『源氏物語』葵巻における御息所の車は「網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり」(②葵二二頁)と、忍びやかながら優美に取り成された網代車であった。その後、乗り主を知られた御息所の車は、「さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」(同二三頁)との侮辱の言葉とともに、「つひに御車ども立てつづければ、副車の奥に押しやられてものも見えず」(同頁)と葵の上方の女房車の後ろに押しやられてしまう。ただし、その際、「榻などもみな押し折られて、すずるなる車の筒にうちかけたれば」(同頁)とあるように、御息所の車の本体そのものは破壊されていない。一方、中世では、落合氏の指摘するように、『塵荊抄』に「六条御息所ノ御車ヲ、葵上の隨身共打破、已ニ車ヨリ取テ出シ奉ル」、『源氏小鏡』に「車のたてところを、御ともの人々あらそひて、みやすところの御くるまをうちそんしなとせしなり」、『源氏物語提要』に「権威につのりたる若もの共、みやす所の車の長柄をおし折」とあることから、葵の上方に御息所の車の轆が折られ、車が損壊したとの見方が一般的であった。〈葵上〉の「破れ車」はこうした理解を反映し、シテ御息所の「恨みの根源というだけでなく、傷ついたまま未だに癒えない心の象徴⁽¹²⁾」としての意味を負うものである。また、〈葵上〉の「破れ車」は、大きな演劇的効果をも持っていた。

『申樂談儀』の犬王の芸風を記す箇所からは、〈葵上〉の「車」を出す演出について具体的に知ることができる。

葵の上の能に、車に乗り、柳裏の衣踏み含み、車副の女に岩松、車の轆にすぎり、橋がかりにて、「三の車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、夕顔の宿の破れ車、遣る方な」と一声で遣りかけて、たぶくと言ひ流し、「憂世は牛の小車の、く、廻るや」などやうの次第、「をぐるまの」、「まの」を張りにていふて、言ひ納めに、とたと拍子踏みし也。後の霊などにも、山伏に祈られて、山伏はとよ、それ「を」ばかりみづかひ、小袖扱ひ、えも言はぬ風体也。

(二六三頁)⁽¹³⁾

六条御息所を演じる犬王は、「車副の女」を伴って「車」に乗っていた。松岡心平氏は、この「車」を出す演出に注目することで、〈葵上〉を「御息所の深層感情への下降劇」として捉え直している。犬王の演出では、「車」の位置によって御息所と葵上の心理的距離がより視覚的に明瞭化される。「梓の弓」に引かれて登場したばかりの御息所は、「東屋の、母屋の端戸に居」という。つまり、車は橋掛かりにあると思われるが、ここでは御息所はまだ葵上への嫉妬を見せることなく、内向的であった。「車」という「密室空間」の中で屈辱の思いを深め、次第に車から出て本舞台に入り、過去を述懐するうちに「枕に立ちよりちよと打てば」と葵上への恨みを爆発させて打擲に及び、ついには葵上を「破れ車」に乗せて連れ去ろうとするに至る。

なお、西村聡氏⁽¹⁵⁾によれば、この「破れ車」は、怨霊となった御息所が地獄の使者として来迎する火車のイメージをも負っているという。前場最後に「枕に立てる破れ車、うち乗せ隠れ行こうよ」と、病床の葵の上を「破れ車」に乗せて冥界へと連れ去ろうとするシテ御息所の姿は、生

霊ではなく怨霊である。ここには、『往生要集』の引用する「観仏三昧経」が描く火焰の化身「玉女」が「金車」に坐して罪人を地獄へ誘うイメージが重ねられるという。そのほか、前掲の井上氏⁽¹⁶⁾によれば、『平家物語』巻六入道死去に描かれる、入道の北の方の夢中に現れる清盛を来迎しようとする猛火の車や、『信貴山縁起絵巻』における護法童子の乗り物としての火焰車、『地獄草紙』の「猛火熾烈なる鉄車」など、中世において地獄と車は一揃いのものとして認識されていたという。

以上のように、〈葵上〉の「車」は、「車争ひ」に端を発する御息所の恨みや傷心を表すと同時に、ただ「憂き」身を悲嘆していたはずの御息所が、嫉妬に燃え、遂には地獄の「悪鬼」へと身を変じるまでの過程をドラマチックに描きだす機能を負うものであった。

二、〈野宮〉の「花車」・「物見車」と『源氏物語』葵卷

①「花車」

一方、〈野宮〉の「車」はどうだろうか。〈野宮〉後場には、「花車」「車」(三例)「網代」「いかなる車」「車争ひ」「物見車」(二例)「おん車」「小車」(二例)と、十二例もの「車」が見える。現在、宝生・金剛・喜多の三流には車を出す小書も残る。小田幸子氏⁽¹⁷⁾によれば、『能口伝之聞書』や『八帖花伝書』には車を出すのが常の演出であるように読める記事があることから、原作時点で車の作り物が出されていた可能性を否定できないという。「車」は、現在常に出される作り物「黒木の鳥居」とともに〈野宮〉の重要なモチーフと捉えられる。

こうした多くの「車」のうち、まず注目したいのは、後シテ御息所が登場する際に乗る「車」の様相である。

野の宮の、秋の千草の花車、われも昔に、巡り来にけり。

「花車」は、『謡抄』に「うつくしくかざりたる車也」と言われるように、第一には「華やかな車」⁽¹⁸⁾と捉えられる。第二に、〈代主〉に「千早振る。賀茂の御生や夏引の。糸毛の花車廻る日の。けふに葵の二葉より我がしめ結ひし姫小松の」とあるように、「花車」は葵の葉で飾られた車が多く出る賀茂祭と関連づけられるものでもあった。⁽¹⁹⁾〈野宮〉における「花車」は、まず「秋の千草の花」で彩られた「車」であるから、むろん明るい華やかさではなく、閑寂でゆかしいイメージを纏うものである。それでも〈葵上〉の「破れ車」とは全く異なり、あくまで美しく装った「花車」であることを、まず忘れてはならないだろう。また、〈野宮〉で描かれる季節は秋ではあるものの、「花車」は「車争ひ」が生じた夏の賀茂祭のイメージを重層化させた表現と捉えられる。

なお、この後シテ御息所が乗る「車」を飾る「花」は、〈野宮〉において重要な意味を持つことにも注意しておきたい。曲中の「花」は、一貫してシテ御息所の人生を彩る恋の盛衰と連動するように置かれる言葉である。御息所には、かつては「桐壺の帝のおん弟、前坊」の妃として「時めく花の色香」をほしのままにしていた時代があったという。また、「花」に慣れ来し野宮が「秋」を迎えると、光源氏の心にも飽きの来たことが表される。「千草の花」の色とともに御息所の「心の色」も移り、その「身」も衰えていく。「秋の花みな衰へ」るとき、御息所と光源氏の関係はついに終焉を迎えようとする。「賀茂の祭の車争ひ」の場面に登場する「秋の千草の花車」は、その身に衰えを萌しつつも、光源氏との恋に身を投じようとする御息所の姿の象徴と言えよう。

②「物見車」

さて、この「花車」を目にしたワキ僧によって「さもあれいかなる車やらん」と問われた後シテ御息所は、「昔」の「賀茂の祭の車争ひ」の様子を回想していく。

【掛合】…シテいかなる車と問はせ給へば、思ひぞ出づるその昔、賀茂の祭の車争ひ、主はたれとも白露の、ワキ所狭きまで立て並ぶる、シテ物見車のさまざまに、殊に時めく葵の上の、ワキおん車とて人を払ひ、立ち騒ぎたるその中に、シテ身は小車のやるかたも、なしと答へて立て置きたる、ワキ車の前後にシテばつと寄りて

【哥】地人びと轅に取り付きつつ、人賜ひの奥に押し遣られて、物見車の力もなき、身の程ぞ思ひ知られたる。よしや思へばなにとも、報ひの罪にも漏れじ、身はなほ牛の小車の、巡り巡り来ていつまでぞ、妄執を晴らし給へや、妄執を晴らし給へや。

注目したいのは、後シテ御息所の「花車」が、【哥】では「人賜ひの奥に押し遣られ」た「物見車」と称されていることである。「賀茂の祭の車争ひ」の場面では、御息所以外の「所狭きまで立て並ぶる」車たち・「人賜ひ」も、みな「物見車のさまざま」であると語られている。この「車争ひ」の「物見車」は、言うまでもなく「祭礼などの見物遊覧などの際に乗って出る牛車」⁽²⁰⁾を指す。つまり、シテ御息所をはじめ、正妻葵上と「さまざま」の女たちは、祭礼、とりわけ祭礼に供奉する光源氏の姿を見ることを目的に「物見車」に乗り、それらの車は「所狭きまで立て並ぶる」、立錫の余地もない状態にあったのである。シテ御息所は、そこで自らの「物見車」の「力もなき、身の程」を思い知らされ、妄執に苦しむことになったと描かれている。

こうした後シテ御息所像の造型をめぐるのは、先行する〈葵上〉のシテ御息所の怨霊としての性格よりも、むしろ本説である『源氏物語』の

御息所の姿を見直しておく必要があると考える。原岡文字氏は、「風雅」⁽²¹⁾「心深さ」と「もののけ」という「一見相反するもの」が、「すぐれて『見る』女君」である六条御息所において結びつけられているという物語の構造を指摘している。〈野宮〉は、こうした『源氏物語』における御息所の「見る」行為によって示される「風雅」「心深さ」という面を特にクローズアップさせ、「車争ひ」に臨む後シテ御息所の造型に反映させているのではないだろうか。

葵巻は賀茂の祭礼見物をめぐって、目映いばかりの光源氏の姿に朝顔の姫君の心が動かされる様子、光源氏による紫の上の髪削ぎ、光源氏と源典侍の応酬といった数々の恋を描いていく。こうした「恋情表白の場・恋の場」⁽²²⁾としての賀茂の祭に向けて物語が動き始めようとする、まさにその初発の場面に「物見車」が置かれていることに注目したい。

御禊の日、上達部など数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋、馬、鞍までみなととのへたり、とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。かねてより物見車心づかひしけり。一条の大路所なくむくつききまで騒ぎたり。所どころの御棧敷、心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり。
(②葵二二頁)

齋院に卜定された桐壺院の女三宮は、一条大路を通して賀茂河原の御禊へと向かうことになっている。齋院に供奉するのは、「おぼえことに容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋、馬、鞍までみなととのへ」た選りすぐりの上達部たちだが、とりわけ「大将の君」が奉仕するとあっては、見物人たちは「物見車」の支度に余念がないといわれている。一条大路は、「所なくむくつき」まで立て込んでおり、光源氏を一目見ようという「よき女房車」(同二二頁)で満ち溢れている。「物見車」から覗く

「心々にし尽くしたるしつらひ、人の袖口」まで、光源氏に見られる期待を込めて、趣向が凝らされたものになっている。

げに、常よりも好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめたまふもあり。大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々うちかしこまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなう思さる。
(同二三―二四頁)

賀茂祭では、「常よりも好みととのへたる車ども」そのものが、女性たちの存在を光源氏にアピールする機能を持っている。そのアピールに対し、光源氏はお気に入りの女性が乗る車には流し目で応えている。供奉の行列では、光源氏が目にとめるはずもない「えせ受領のむすめ」までもが「心の限り尽くしたる車ども」に乗り、媚態を見せて胸をときめかせるというありさまである。こうした「常よりも好みととのへたる車ども」を差し置き頂点に立つのが、光源氏の正妻葵の上の車であった。「儀式もわざとならぬさまに」設え、「よそほしうひきつづき」とある葵の上の車は、「大殿のはしるければ」と格別な体をなしており、光源氏と隨身たちからも礼を尽くされていた。光源氏を何としても見たいという女性たちの執念、そして同時に光源氏からの処遇のあり方を示すものとして、賀茂祭の「物見車」は立ち並んでいたのである。

こうして一条大路は、光源氏を一目見ようとする女性たちの恋で充溢した空間となっていた。御息所も、この恋の空間にひっそりと身を置いていた。御息所の車は、「網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車」(同二二頁)である。自らの存在を誇示しようとする華やかな車の多い

中、奥ゆかしく趣味のよい体ながら、主人は奥に密やかに引き入り、お忍びと一目でわかる「車」の様相そのものが、「恥がましきこと」や「世の中の人」に知られることを何よりも恐れる御息所のあり方を暗示している。

③「車争ひ」

「車争ひ」は、こうした性格の御息所に「所を得ぬ自らの位置」⁽²³⁾を思い知らせる事件であり、彼女が自尊心を傷つけられた屈辱から「ものけ」になっていく契機としての意味を持っていた。ただし、この「車争ひ」は、御息所にとってももう一つの意味を持つ事件としてその身に刻まれていることに注意したい。

ほどほどにつけて、装束、人のありさまいみじくととのへたりと見ゆる中にも、上達部はいとことなるを、一とこの御光にはおし消たれためり。…〈中略〉…めづらしき行幸などのをりのわざなるを、今日は蔵人の将監仕うまつれり。さらぬ御隨身どもも、容貌姿まばゆくととのへて、世にもてかしづかれたまへるさま、木草もなびかぬはあるまじげなり。

(②葵二五頁)

齋院に供奉する光源氏は「一とこの御光」と形容されており、どんなに立派に整えた上達部も霞んでしまうほどの輝きを放っていた。史上は見出せない「蔵人の将監」を含め、「容貌まばゆくととのへ」た御隨身を従えた光源氏は、「木草もなびかぬはあるまじげ」なほどの威勢と絶賛されている。車争いの末に「副車の奥に押しやられ」た御息所は、「ものも見えず」と視界を殆ど遮られ、屈辱に「ものも見帰らん」との心境にありながら、「事なりぬ」との光源氏の行列を告げる知らせに「さすがにつらき人の御前渡りの待たる」と胸を揺さぶられる。おの

れの存在には気づくことなく「つれなく過ぎたまふ」という対応を示す「一とこの御光」である光源氏に目を凝らし、「なかなか御心づくしなり」(同二三頁)とかえって恋心を深まらせていくことになった。

涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま容貌のいどしう出でばえを見ざらましかばと思さる。(同二四頁)

「車争ひ」で屈辱を味わいつつも、「物見車」中の御息所は、光源氏の「目もあやなる御さま容貌のいどしう出でばえ」を見ずにはいられなかったのである。御息所にとっての「車争ひ」は、ただ一目光源氏を見たことによって妄執をさらに深化させるきっかけとなった事件であった。ここで、車争い前の御息所の思いを振り返っておこう。

大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。

(同一八頁)

御息所は、光源氏の「御心ばへもいと頼もしげなき」様子、また「深うしもあらぬ御心のほど」を悲嘆しつつ、「下りやしなまし」と伊勢下向を考えていた。しかし、この「車争ひ」以降、御息所は「つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく」(同三二頁)、「なほふり離れなむことは思し返さる」(同三四頁)と、光源氏から完全に「ふり離れ」ることに逡巡し、伊勢下向の意志が強く揺らぐようになっていくのである。

むろん「車争ひ」は、〈葵上〉が「破れ車」で強調したとおり、『源氏物語』において御息所が生霊となるきっかけの出来事であったことは言うまでもない。

年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも碎けぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまな

りし御禊の後、一ふしに思し浮かれにし心鎮まりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所に行きて、とかくひきまさぐり、現にも似ず、猛くいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度重なりにけり。

(同三六頁)

「はかなきことのをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御禊」、すなわち「車争ひ」をきっかけに、御息所は「思し浮かれにし心鎮まりがたう」状態となり、「夢」の中で葵の上への激しい憎悪を剥き出しにしていく。ただし、忘れてはならないのは、「車争ひ」後、この葵の上への敵愾心と同じように、決して断ち切ることでできない光源氏への思いが語られていることである。

宿世のうきこと、すべてつれなき人にかで心もかけきこえじ、と思し返せど、「思ふもの」なり。

(同三七頁)

この「思ふもの」について、『源氏釈』⁽²⁴⁾には「思はじと思ふも物と思ふなり言はじといふもこれも言ふなり」、『奥入』⁽²⁵⁾には「思はじと思ふものを思ふなり思はじとだに思はじやなぞ」との注が引かれている。⁽²⁶⁾「つれなき人」光源氏のことを思うまい、と自らに繰り返しい聞かせる御息所の胸中で、光源氏への執心は募るばかりであった。

以上のように、『源氏物語』葵巻における「車争ひ」は、御息所が葵上への恨みや傷心を募らせて生霊となるのと同時に、御息所が光源氏を一目見たことで、その恋心をさらに深めるきっかけとなる意味をも併せ持つ事件であったと言える。御息所は「車」の中で屈辱による落涙を恥じつつも、「目もあやなる御さま容貌のいとどしう出でばえを見ざらましかば」ときらびやかな光源氏の姿を見ずにはいられなかったことを思い返す。葵巻における「車争ひ」の「車」とは、光源氏への抑えきれな

い恋心、光源氏を一目見たいという期待、そして実際にその姿を目にしたことで深まる光源氏への執心といった、御息所の妄執で満たされた空間でもあった。〈野宮〉では、物語におけるこうした「車」の意味が掬い取られ、「秋の千草の花車」「物見車」として表現されることで、〈上〉のように恨みを抱いて「破れ車」に乗る怨霊ではない、もう一人のシテ御息所像が造型されたと考えられる。

三、「月」をめぐって

〈野宮〉では、後半に差し掛かるにつれ、「月」が大きく姿を現して来る。

〈前場〉

【ロンギ】 後半

……シテ去りて久しき跡の名の、地御息所はシテわれなりと、地夕暮れの秋の風、森の木の間の夕月夜、影幽かなる木の下、黒木の鳥居の二柱に、立ち隠れて失せにけり、跡立ち隠れ失せにけり。

〈後場〉

【掛合】

ワキ不思議やな月の光も幽かなる、車の音の近づくかたを、見れば網代の下簾、思ひかけざる有様なり、いかさま疑ふ所もなく、御息所にてましますか、…(略) …

【哥】

……身はなほ牛の小車の、巡り巡り来ていつまでぞ、妄執を晴らし給へや、妄執を晴らし給へや。

【詠】

シテ昔を思ふ花の袖。地月にと返す気色かな。

〔序ノ舞〕

【ワカ】

シテ野宮の、月も昔や思ふらん。地影淋しくも、森の下露、森の下露。

前シテは最後に御息所であると正体を明かし、「森の木の中の夕月夜、影幽かなる木の下、黒木の鳥居の二柱」に姿を隠す。この表現は、集成『謡曲集』下〈野宮〉の頭注が指摘するように、『古今和歌集』秋上の「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」をふまえたものである。鬱蒼と茂る暗い森に漏れ出るかすかな月影と連動するかのように、「車争ひ」を中心とするシテ御息所の「昔」の思い出が展開されていく。

このシテ御息所の「昔」を描くにあたり、この『古今集』歌とともに強く意識されているのが、『源氏物語』賢木巻の「月」であると考えられる。賢木巻では、野宮を訪れた光源氏と御息所の出会いにおいて、「月」が重要な役割を果たしている。

〔源氏〕「あなたは、簀子ばかりのゆるされははべりや」とて、上りゐたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさまにほひ似るものなくめでたし。〈…中略…〉月も入りぬるにや、あはれなる空をながめつつ、恨みきこえたまふに、こころ思ひあつめたまへるつらさも消えぬべし。やうやう今は、と思ひ離れたまへるに、さればよ、と中々心動きておぼし乱る。〈…中略…〉やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。〈…中略…〉女もえ心強からず、なごりあはれにてながめたまふ。

ほの見たてまつりたまへる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人々は身にしめて、過ちもしつべくめできこゆ。

②賢木八七―九〇頁

野宮で「物越しばかりの対面はと、人知れず待ちきこえ」る御息所の目前に、「はなやかにさし出でたる夕月夜」に照らし出されつつ、「似るものなくめでた」き光源氏が現れる。この場面における「月」については、前掲原岡氏が「光源氏その人の姿を象るための道具立て」であるという意味づけで以降、その重要性がさまざまに論じられている。玉上琢也氏は、この場面における「月」は「はなやかに」とはあるものの、本場面が九月七日頃であることを考慮するならば、実は「それほど明るくはなく、「月の光に照らされた君の姿が、あまりに美しいので、月も明るく思われる」と述べる。また斎藤菜穂子氏は、「源氏は北の対に入ったとあり、寝殿造りは南向きなので、その南側から源氏がはいったならば、正に源氏を背後から照らし出すように、月が輝いていたことになる」という。この「はなやか」な「月」とは、一見、光り輝く月を意味する何ら変哲もない表現であるかのようだが、実は『源氏物語』以前には用例を見出せず、物語に固有の表現である。青井紀子氏は、『源氏物語』の「はなやか」な「月」は、賢木巻に初めて登場するものであり、「源氏の形象にまで高め」られた「匝巻」の表現であると論じている。物語にしていることを、まずは覚えておきたい。

また、「月も入りぬるにや」と月の沈んだ暗い空を眺めつつ、恨み言を述べる光源氏の姿と言葉とに接するうち、御息所の胸の内に積もっていた「つらさ」は消えていく。前節で確認したように、光源氏を見たこととて思いを深くし、伊勢下向の意志が揺らいだ葵巻の車争いの場面と同

様に、伊勢へ下ろうと決意していたはずの御息所の胸中は「中々心動き
ておぼし乱る」ありさまとなっていく。

さらに、はかない逢瀬の後、御息所は「え心強からず、なごりあはれ
にてながめたまふ」と放心してしまふ。特に注目したいのは、逢瀬の時
を持った光源氏の姿が、御息所の胸中に「月影の御容貌」として深く刻
まれていることである。光源氏は、「月影」そのものに重ねられつつ、
名残を惜しまれる存在であった。

こうした『源氏物語』賢木巻の「月」のあり方は、〈野宮〉後半にお
いて強く意識され、取り込まれているのではないか。〈野宮〉前場にお
いて、シテは「人こそ知らね宮所を清め、ご神事をなしむらふ」体で
「花に慣れ来し野宮」に現れ、かつて「長月七日」に、光源氏が野宮を
参詣した折の様子をこまやかに思い返していた。前節に見たように、後
場冒頭では、「秋の千草の花車」「物見車」に乗り、「賀茂の祭」で光源
氏の来訪を待っていたシテ御息所の過去の様子が再現される。秋の花で
いっぱい彩られた「野宮」と「車」。かつてシテ御息所が光源氏の来
訪を待ち続けたこの両空間において、「月」はまるでシテ御息所の期待
に応えるかのように——それはあたかも光源氏その人であるかのように
——、御息所の前に出現して来るのである。

さらに、葵巻で齋宮の御禊に供奉する光源氏の姿は「目もあやなる御
さま容貌のいとどしう出でばえ」「一とこの御光」と表現されていた
ことを、ここで再度思い起こしたい。先に見た『古今集』秋上「木の間
よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」に歌われるのと同
様に、光源氏のこの輝かしい姿をかすかに見た御息所は、葵巻において
「なかなか御心づくしなり」（二三頁）との状態に陥っていたのであった。
『源氏物語』の葵巻・賢木巻からは、周囲から隔てられ、閉ざされた

「車」「野宮」という空間で、御息所が輝く光源氏の訪れを待ち、光源氏
を目にした後にいっそう物思いを深化させるといふ、共通の構造が見出
される。〈野宮〉において、葵巻における車争いと、賢木巻の野宮の別
れの段とが二重写しに描かれているのは、御息所をめぐるこうした物語
の構造を強く打ち出そうとしたためではないだろうか。

なお、周囲から隔てられた空間に籠り、光源氏を待ち続ける御息所の
性格を強調するために、〈野宮〉ではいくつかの仕掛けも施されている。
第一には、「森」のイメージである。松岡心平氏³³⁾によれば、「森」は『源
氏物語』賢木巻には見えず、『新古今和歌集』藤原定家の「消えわびぬ
うつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露」を下敷きとするもので
あるという。作者禅竹は、新たに定家歌による「森」のイメージを重ね
ることで、『源氏物語』では「野辺」「野原」と表現されていただけの野
宮に、より強い神域性を付与したことになる。

第二に注目されるのは、『源氏物語』では「ものはかなげなる小柴垣
を大垣にて、板屋どもあたりいとかりそめなめり」（②賢木八五
頁）と描写されるのみの「小柴垣」という言葉が、〈野宮〉においては
三度も繰り返し返されることである。

- ・ われこの森に来て見れば、黒木の鳥居小柴垣、昔に変はらぬ有様な
り
- ・ ものはかなしや小柴垣、いと仮そめのおん住まひ
- ・ 気色も仮なる、小柴垣、露打ち払ひ、訪はれしわれも、その人も、
ただ夢の世と

「小柴垣」は『連珠合璧集』『光源氏一部連歌寄合之事』『源氏物語小鏡』
（第二類宮内庁書陵部本・都立中央図書館本）に挙げられるように、中
世では源氏寄合として確立されている言葉である。この「小柴垣」を繰

り返すことで、〈野宮〉では光源氏の訪れた野宮の結界のイメージが強められていることになる。このように、〈野宮〉では「森」や「小柴垣」によって『源氏物語』における「野宮」の神域性をより純化する工夫が施されているのである。その結果、〈野宮〉の光源氏は固く閉ざされた神域空間に分け入って御息所と情を交わしたという、禁忌のエロスのイメージが高められるとともに、光源氏の「おん心」の「あはれ」さが強調されることになる。

おわりに——「神は受けずや」をめぐる——

〈野宮〉後場の御息所は、「花車」で登場し、「車争ひ」による妄執を深めながらも、そこから「昔を思ふ花の袖」と「昔」へ回帰し、キリでは「花」の時代の再来を求め、辛い思い出を喚起させるはずの「車」に乗って去っていく⁽³⁵⁾。

このキリにおいて、シテ御息所は野宮の鳥居の前で迷いを見せ、「生死の道を、神は受けずや、思ふらんと」と語ることに注目しておきたい。この「神は受けずや」は、『古今集』の「恋せじと御手洗河にせし禊ぎ神はうけずぞなりにけらしも（巻十一・恋歌一）、あるいは『伊勢物語』六十五段の「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」をふまえていると考えられる。

注意したいのは、この「神はうけず」歌が、『孟津抄』⁽³⁶⁾において、葵巻の車争ひ直後の御息所の詠歌「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」（二四頁）という、光源氏を「見る」ことよって恋心を深める歌と関連づけられていることである。御息所は、この歌の前にも「笹の隈にだにあらねばにや」（二三頁）と『古今集』

の「ささの隈檜の隈河に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」（巻二十・神遊びの歌）を引き、光源氏の「影を見」ることに固執していたのであった。これまで見てきたように、物語における「車争ひ」は、御息所の自尊心を著しく傷つけた出来事であると同時に、御息所の目に「一とこの御光」である光源氏の姿を刻み、より愛執を深めるきっかけとなった意味も併せ持つ。〈野宮〉はこうした物語の「車争ひ」の意味を取り込んでいる。〈野宮〉において「神は受けずや」と懷疑するシテ御息所は、「恋せじ」と誓いながらも恋に迷妄してしまふ性格であり、そのもの思いの起点として、光源氏の姿をわずかにでも見ようと「物見車」に乗った結果、遭遇してしまった「車争ひ」が描かれている。〈野宮〉では、「車争ひ」において葵の上方から屈辱を味わわれたことも、野宮に光源氏が来訪したことも、ともにシテ御息所が光源氏を見たことよって恋心を深めた「昔」という同一のレベルに統合されていく。それゆえに、シテ御息所は「車争ひ」後に「妄執を晴らし給へや」と悲嘆してから物の怪になるのではなく、光源氏その人とゆかりの深い「月」に向かって懐旧の舞を舞うという行為に及ぶのである。

〈野宮〉は、先行する〈葵上〉のシテ像をふまえるだけでなく、『源氏物語』葵・賢木両巻に共通する御息所の性格を深く抉り取った作品であると位置づけられよう。

註

- (1) 日本古典文学大系『謡曲集』下（岩波書店、一九六三年）、新潮日本古典集成『謡曲集』下（新潮社、一九八八年）、新日本古典文学大系『謡曲百番』（岩波書店、一九九八年）、能を読む③『元雅と禪竹——夢と死とエロス』（角川学芸出版、二〇一三年）
- (2) 伊藤正義『新潮日本古典集成 謡曲集下』〈野宮〉「解題」（新潮社、一九八八年）
- (3) 井上愛「『野宮』の六条御息所像試論」（『国文目白』四五巻、二〇〇六年二月）
- (4) 河添房江「源氏物語と源氏能のドラマトゥルギー——謡曲『野宮』との比較——」（二

- 〇〇八年パリ・シンポジウム 源氏物語の透明さと不透明さ―場面・和歌・語り・時間分析を通して―(青簡舎、二〇〇九年)
- (5) 味方健「能本『野宮』の構造」『能の理念と作品』(和泉書院、一九九九年十二月)
- (6) 伊藤正義「金春禪竹の研究」(赤尾照文堂、一九七〇年)、注2など。
- (7) 三角洋一「作品研究 玉鬘」『観世』五五―七(一九八八年七月号)、松岡心平「源氏物語を読む金春禪竹」『Z E A M I ― 中世の芸術と文化』三号(二〇〇五年十月)、同「物語の舞台を歩く 能大和の世界」(山川出版社、二〇一一年五月)、石黒吉次郎「源氏物語」と中世芸能」『講座源氏物語研究 第四卷 鎌倉・室町時代の源氏物語』(おうふう、二〇〇七年) など。
- (8) 落合博志「『源氏物語』と能 ― 『葵上』を中心に ―」『国文学解釈と鑑賞』五九―一一(一九九四年十一月)
- (9) 『塵荆抄』(古典文庫)
- (10) 第一類京都大学本(伝持明院基春本) (岩坪健『源氏小鏡』諸本集成 和泉書院、二〇〇五年)
- (11) 『源氏物語提要』(桜楓社、一九七八年)
- (12) 注8
- (13) 『申樂談儀』の本文は『世阿弥 禪竹』(岩波書店、一九七四年)に拠る。
- (14) 松岡心平「世阿弥能の原点としての『葵上』」『観世』七三―二(二〇〇六年二月)
- (15) 西村聡「『葵上』における死霊のイメージ ― 火車に乗った六条御息所 ―」『能の主題と役造型』(三弥井書店、一九九九年四月)
- (16) 注3
- (17) 小田幸子「『野宮』の作り物」『能楽タイムズ』三七九号(一九八三年十月)
- (18) 植木朝子「『花車』考 ― 能・小歌・意匠の交響 ―」『国語国文』七〇―一〇(二〇〇一年十月)
- (19) 注18の指摘による。
- (20) 『日本国語大辞典』第二版(小学館)
- (21) 原岡文子「六条御息所考 ― 『見る』ことを起点として ―」『源氏物語の人物と表現 ― その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年、初出一九八三年)
- (22) 林田孝和「源氏物語にみる祭りの場」『源氏物語の発想』(桜楓社、一九八〇年)
- (23) 中井知子「葵祭」『講座源氏物語の世界』第三集(有斐閣、一九八一年)
- (24) 『源氏積・奥入・光源氏物語抄』(武蔵野書院、二〇〇九年)。ただし、私に表記を改めた。
- (25) 注24による。ただし、私に表記を改めた。
- (26) ただし、この歌が元来収載されていた歌集などの詳細については不明である。

- (27) 新編日本古典文学全集『古今和歌集』(小学館、一九九四年)
- (28) 注21
- (29) 玉上琢也『源氏物語評釈』(角川書店、一九九六年)
- (30) 斎藤菜穂子「野宮の源氏を照らす月」『源氏物語の鑑賞と基礎知識 No.10 賢木』至文堂、二〇〇〇年)
- (31) 『源氏物語』以降の用例については、『松浦宮物語』に「月はなやかにさし出でてをかきほどに」、『春の深山路』に「雲間の月はなやかに差し出でたる光に」の例を見るのみである。
- (32) 青井紀子「源氏物語の月をめぐる断想」『中古文学論攷』五号(一九八四年十月)
- (33) 松岡心平「プリマヴェーラのように」『能 ― 中世からの響き ―』(角川書店、一九九八年、初出一九九六年)
- (34) 新編日本古典文学全集『新古今和歌集』(小学館、一九九五年)
- (35) 最終的に解脱よりも恋を希求する御息所の姿は、同じ金春禪竹作の〈定家〉において「苦しみ隙なき」状態からの救いを願っていたにも拘らず、「定家葛」の「這ひ纏はるる」石塔の中に再び帰っていくシテ式子内親王のあり方にも重なるものである。
- (36) 『孟津抄』(桜楓社、一九八七年)
- 【記】本稿は、二〇一六年九月開催の「作品研究セミナー」(於…法政大学)における発表「〈野宮〉の「車」と「月」をめぐる」にもとづく。席上ご指導・ご助言くださった皆様に御礼申し上げる。